

地域貢献における学生のグループ分けに関する研究

—— PBL 型授業の比較を通して ——

木 原 一 郎

(受付 2015年 9月30日)

要 約

本年度開講された2つのPBL型授業の比較をとおして、地域貢献の側面をふくむ講義においてのグループ分けの方法について、分析・考察を行った。最終的な提案の質に関しては大きな差は認められなかったが、案をまとめるのに要した時間は同じ意向をもつ学生同士でグループ化された方が早く提案をまとめることができた。自学自習の取り組みに関しては大きな差が認められなかった。学生個人による講義の振り返りでは、ランダムでグループ分けを行った地域の方が、グループ分けに関する気づきやチームビルディングにおけるグループ内コミュニケーションについての気づきに関する記述が多く確認できた。

以上より、地域貢献の側面をふくむ講義においては、対象地域の状況やどのような提案を求めているかに応じて、グループ分けを工夫していくことで、地域イノベーションを実現する可能性と、学生個人の学びを高めることが明らかとなった。

1. 研究概要

1-1. 研究の目的

本学に地域イノベーションコースが開設されて2年目を迎えた。教育と研究と社会貢献の好循環と、それを通じた地域イノベーション人材の育成を目標に設計がなされた本コースでは、本年度は座学だけでなく学外演習を含むPBL型授業が開講された。

PBL型授業は教育でありながら、地域貢献の側面も持ち、それらを両立させることが担当教員の役割である。講義を進めていく上で、グループワークの場合、そのグループをどう分けるかが提案の質に関わる一つのキーポイントとなる。一方で成績評価の観点で考えると、ランダムに公平なチームであるべきではないかという仮説もある。

そこで本研究では、地域イノベーションの実現を目指す上でのグループ分けの方法について分析・考察することを目的とする。

1-2. 研究の位置付け

本コースのPBL型授業は開講後入学した学生であれば誰でも受講できる学年・学部横断型の講義である。そのため本学においては、これまでとは違った学習の方法をまとめる必要がある。本研究の考察も地域貢献の側面を持つ講義において、その進め方を支援する典型・知見の一つとして位置付ける。

1-3. 研究の方法

本研究では2つの講義の成果について比較分析を行う。現在本学が連携している自治体は、広島市西区、廿日市市、北広島町である。そのうち2015年度前期、筆者が担当した地域である、廿日市市玖島・浅原地区、広島市西区西広島駅周辺を対象としたそれぞれの講義の成果について比較する。受講者数が廿日市は29名、西広島駅周辺は28名とほぼ同数であること、全学部の学生が受講していることより、比較するには最適な講義であると考えられる。

対象講義それぞれの地域での取り組みの概要をまとめ、グループ分けの方法と提案の質・自学自習・振り返りの記述について比較分析していく。

2. PBL型授業の概要とグループ分け

2-1. PBL型授業

PBL型授業とは、ある課題を基盤として講義を構成する手法の一つである。本コースでのPBL型授業は、ひろしま未来協創プロジェクトと題し、地域貢献に重点を置き、連携自治体と事前に協議した地域課題に合わせて講義内容を構成し、学内での学習と現地を訪問しての学習を組み合わせ、学びを深めていく講義である。また現地訪問では地域貢献を少しでも実現していけるように活動するを目指す。

講義の構成として、各地区に3回現地訪問実習が設定されていて、各地域の行事等に影響がないよう日程を定めている。

比較対象地域の現地訪問実習の日程は表1の通りである。対象地域の取り組みの概要を以降にまとめる。

表1 現地訪問日程

2015年度	一回目訪問	二回目訪問	三回目訪問
廿日市玖島・浅原	5月16日	6月20日	7月18日
西広島駅周辺	5月30日	6月27日	7月25日

2-2. 廿日市市浅原・玖島

廿日市市玖島・浅原地区は、2014年度をもって、玖島小学校、浅原小学校ともに別の小学校に統合され、閉校となった。その閉校後校舎の利活用方法を、地域の未来と合わせて考えてほしいというのが、地域と連携自治体から要請であった。また2014年度までにこの地域で先行的に活動していたゼミ（松川ゼミ）の活動結果から、農業が一つの鍵となるであろうことは導き出されていた。それを踏襲して本講義を開始した。玖島・浅原地区ともに校舎の利活用方法について地域住民同士も議論は十分ではなく、また学生はこの両地区



図 1



図 2



図 3

に訪問したことも、農業にも接したことがなかったため、この地区の導入は時間をかけることとした。

一回目の訪問では農作業（茶摘み）に参加することと地域の特徴を知るフィールドワークを行った（図 1）。そこで農業の様子や地域の状況などを理解し次回へつなげた。

二回目の訪問は、学生から閉校後校舎の活用案に関して、ポスターセッションの形式で発表した後、どのような方向性のもとに校舎を活用していくべきかを明らかにするため、ワールドカフェ方式の協創的ヒアリングを行って（図 2）、キーワードを抽出した。

三回目の訪問は、前回の協創的ヒアリングを踏まえて、閉校後校舎の活用についての修正案をグループごとに発表し（図 3）、賛同する内容ごとに地域の方々にも分かれてもらい分科会を行った。その分科会での意見交換をもとに、修正案を再度修正し提案書としてまとめた。

2-3. 広島市西区西広島駅周辺

広島市西区西広島駅周辺は、広島市西区が設置した「西広島駅周辺にぎわいづくり委員会」と、その関連組織「西広島駅周辺にぎわいづくり実行部会」とともに昨年度から活動を継続している。昨年度は先行的に活動していたゼミ（三浦ゼミ）が今後どのような方向に向かって進むべきかのビジョンまとめるために、委員会のメンバーや地域住民とともにワールドカフェ方式で話し合いを行い、そこから今後に向けてのキーワードが導き出された。本年度、西広島駅周辺にぎわいづくり実行部会はキーワードに沿った具体的な実施案を必要とされていた。そのため、西広島駅周辺にぎわいづくり実行部会参加者と対等に学生もどのようなことを実施すべきかを調査検討し提案を行うこととした。

一回目の訪問では、提案したい仮説をもとにヒアリングを行った。そこで西広島駅周辺の現状を把握し、仮説の修正を行った。同日、にぎわいづくり実行部会が開催され、参加者がそれぞれ今後実施したいことを発表し、意見交換を行った。

二回目の訪問では、一回目の意見交換をもとに、それぞれの案を発展修正し、裏付けや協力者を探す調査を行った。その調査結果を反映させて案を修正したものを、再度にぎわいづくり実行部会で発表し、意見交換を行った。



図4



図5



図6

三回目の訪問では、二回目の意見交換をもとに、プロトタイプづくり、実験・仮実施、さらなる地域の調査など、進行具合によってグループごとの活動を変えた。その各グループの活動結果をまとめ、にぎわいづくり実行部会で報告し、今後実施・継続させていくための提案を発表した。

2-4. グループ分けの方法

廿日市、西広島駅周辺の両地域の受講者の内訳は表2のようになっている。それぞれの地域におけるグループ分けの方法と活動内容についてまとめたものが表3となっている。

表2 受講者内訳

受講者	商	人文	法	経	人環	計
廿日市玖島・浅原	8名	5名	6名	4名	6名	29名
西広島駅周辺	1名	5名	5名	8名	9名	28名

表3 グループ分けの方法

グループ分け	一回目訪問		二回目訪問		三回目訪問
廿日市玖島・浅原	ランダム	→	ピッチ	→	同グループ
	体験・調査		提案・ヒアリング		修正提案・分科会
西広島駅周辺	ランダム	→	同グループ	→	同グループ
	調査・提案		調査・修正提案		仮実施報告・提案

廿日市では一回目の訪問時は、男女比のみでランダムに指定した4～5名の6グループによって活動を行ったが、二回目の訪問では現地で感じたことをもとに学生から閉校後校舎の活用案を提案する予定としていたため、同じ意向をもつ学生同士でチームビルディングをおこなうためにピッチ方式のワークショップを行い、2～6名の8グループに分かれた。三回目の訪問は、二回目の訪問と同じグループで活動を行った。

西広島では、一回目の調査の時点では、廿日市同様に男女比のみを考慮した4～5名の

ランダムなグループ分けをおこない、6グループに分かれた。一回目の提案と意見交換をもとに、二回目、三回目の訪問に向けての作業をおこなったため、一回目のランダムなチーム分けをそのまま継続して講義を進めた。

同じ意向をもつ学生同士のグループ分けと、ランダムなグループ分けのチームによる講義の成果や取り組みの状況を比較検討する。

3. 講義の成果や取り組み状況の比較

3-1. 提案内容

廿日市玖島・浅原地区と広島市西区西広島駅周辺での最終提案の内容とそこに至る経緯は以下のようになっている。

廿日市玖島

コミュニティカフェ

ヒアリングを通して、「地域の人たちが実行にうつせるようなきっかけづくり」というキーワードに着目し、誰もが気楽に立ち寄れる交流空間を常設で開設することを提案。教室1室をカフェ空間として利用。

各部屋を店舗・体験教室などに活用

「持続可能性」というキーワードに着目し、週一回開催ものや、常設ものなどの使い分け、できるところから始め、段階的に展開現状の校舎をできる限りそのまま使う形で、学校全体を人が集まる場所にすることを提案。

フリーマーケットの実施

「玖島ならではの」というキーワードに着目し、学校の備品販売から始め、その後は玖島や広島からあつまるフリーマーケットへの展開を提案。くじまの森などのように地域の人たちの協力が必要であると提言。

フリースクールの実施

「幅広い世代が一緒に笑いあえる場所」というキーワードに着目し、広島の不登校児を対象に、自然に触れながら地域の人々とも繋がりを持つフリースクールを提案。管理方法、運営方法など工夫が必要、全国の事例は調査済みである。また新設される教育学部等の協力や英語英文学科の学生による英会話教室等本学の知見の生かし方も提言。

アニメーションによるまちづくり

「多文化との交流」というキーワードに着目し、玖島の文化に着目したアニメーションを製作して発信することを提案。

廿日市浅原

フリーマーケット，体験イベントの実施

ヒアリングを通して、「着火剤が必要」というキーワードに着目し、小学校の校庭を利用して、FOOD, STUDY, LEISURE を軸に展開するイベントの開催を提案。小学校は拠点・会場として、校庭を蚤の市会場として活用，耐震荷重軽減側への用途変更（宿泊所）を提案。

農業体験から貸し農園（農地管理）へ

「人と人をつなぐための農業」というキーワードに着目し，農業体験から始め，食事会，収穫物販売を通して，農業従事者の拡大を目指すことを提案。小学校は休憩所，食事会会場，あおぞら市会場，グラウンドを畑への転用を提案。

文化としての茶摘みツアー＋地域行事体験

「浅原の歴史と文化」というキーワードに着目し，茶摘み体験＋食事会に加えて，地域行事参加を組み込んだツアーパッケージを作ることを提案。小学校は宿泊所へ用途変更を提案。

広島市西区西広島駅周辺

こい焼き

いのしし肉を使ったお好み焼きで，西広島己斐地区のキラーフード（特産品）として定着させることを提案。住民からの発案で，計画を洗練・裏づけする形ですすめた。

音楽を中心としたイベント，マップ作り

若者があつまる街を目指して，段階的にライブ開催やマップ作りを行い，若者が集まってくるように情報発信していくことを提案。昨年度地域住民から実施したいことの一つに挙げられていた夜市について，ターゲットを絞り，アレンジして企画を具体化していった。この提案をもとに地域住民が実際にライブを開催した。

インフィオラータ開催，プランターの花の改良設置

花のまち西広島を発信するため，水辺フェスタなどで，インフィオラータを開催することを提案。

また日常的にもプランターの花を個別につるすことで、自然と目に入ってくるように工夫をすることを提案。以前は植木や植物に関するお店が多く、またプランターの花への水やりの活動がつづいていることを参照し、花のまち西広島を発信するために考えられた企画案。

西広ツアー

人が集まるまちを目指して、まちの見どころ巡りやまちゼミを組み合わせるツアーを計画することを提案。昨年度地域住民から実施したいことの一つに挙げられていたマップ作りや広島市西区の方の意向も含めて考えられた企画案。

こいのぼり商店街

鯉にまつわる土地という歴史を発信するため、こいのぼりを模したタペストリーを通りや店舗前に飾り付け地域内外にアピールし、カーブとも連動して、集客と情報発信を行うことを提案。また使わなくなった鯉のぼりをあつめ、有効活用する等、鯉にまつわる歴史や広島カーブと連動したいという地域住民の思いから考えられた企画案。

1つのグループは、最終提案まで至らず、他のグループのサポートに回った。

一概には比較できないが、提案自体の質に関しては両地域に大きな差はなく、後期に引き継ぐことで実現できそうなものとなっている。

3-2. 自学自習

ひろしま未来協創プロジェクトでは、二回の座学講義を学外演習に割り当てて地域を訪問する時間計算となっている。そのため、15回の講義中6回の休講がある。その時間は休講ではあるが、受講学生にとっては共通の時間が取りやすく、格好の自学自習の時間となる。そのことに関しては講義開始時から常に意識付けし続けており、私自身もその時間は教室に赴くこととしていた。その時の自学自習の参加状況を表4にまとめた。×は参加者なし、△半数以下、○半数以上の学生が取り組んだ日である。

休講時の自学自習の取り組みは、廿日市の講義の学生は、同じ意向を持つ学生同士での

表4 休講時の自学自習取り組み

廿日市玖島・浅原	休講1	訪問1	休講2	休講3	訪問2	休講4	休講5	訪問3	休講6
	×		△	△		○	△		×
西広島駅周辺	休講1	休講2	訪問1	休講3	休講4	訪問2	休講3	休講4	訪問3
	×	×		×	△		△	○	

グループ分け以降自学自習を行っていることが確認できる。一方、全く自学自習を行っていないグループもあった。同じ意向の学生同士のグループもあれば、結果的に日頃から仲の良い学生同士となっているグループもあったためと思われる。仲の良い学生同士のグループは、他の時間を使って自学自習していた可能性はあるが、提案の深まりからはそれは認められなかった。

西広島の講義の学生は、休講時の活用を始めるのが、廿日市の講義の学生に比べて遅かった。それはランダムなグループで進めていたので、グループ内で議論する環境を整えることや共通認識を増やすことに時間がかかったのではないかと思われる。また三回目の訪問に向けて切羽詰まった状況になり、追い込みとして後半は休講時を活用する機運が高まったのではないかと思われる。廿日市の講義の学生と比べると、休講時の活用に関しては積極的な取り組みではないと言える。

両講義ともに提案内容が共有できたグループから休講時を活用する傾向が確認できた。

3-3. 活動の振り返り

三回のそれぞれの訪問のあと、必ず振り返りをさせ、文章にまとめることをしている。また両地域とも活動全体を振り返るレポートも課した。そのなかから地域貢献に関する気づき、グループに関する気づき等の記述を抜粋する。（※学生の記述をそのまま記載している）

廿日市玖島・浅原

現地で得たことと学んだこと（レポートより）

- ・これらの活動を通して、下調べや、内容について深いところまで調べておくことの大切さ、グループ内での役割分担の重要性も学ぶことができた。
- ・現地の人たちの声を生で聞くからこそ、その時考えていたアイデアをより発展させることができるし、新たなアイデアが生まれるきっかけとなるということを実感することができました。
- ・1人ではできないことも多くの人がかかわっていくことによって実現の可能性が出てくるのだと学びました。
- ・浅原の農業の現状を詳しく知ることができた。また浅原の人たちの求めている人材についても知ることができた。
- ・大切なのはどちらが正しいかでなく、チーム内で同じ方向を向いているか、ということを感じました。
- ・チーム内でビジョンをしっかりと確認したことで、地域の方々にイメージをもってもらいやすくなりました。
- ・田舎には田舎のいいところ、都会には都会のいいところがあることがわかりました。

- ・自分たちは「現地の発展、改善」を考えるあまり、いつの間にかこの活動を進める上で欠かしてはならない「当事者意識」をないがしろにしてしまっていたのではないか。
- ・様々な職種の人たちの意見なども聞くことができ今後、自分たちの案をさらに具体的な案にすることができた。このことから同じ石を持つ人たちで集まり協力することの大切さを学んだ。
- ・一番大事なものはグループのチームワークであることを学んだ。
- ・地域の人たちとのコミュニケーションの取り方
- ・その土地の特色や人口比率，都市部からのアクセス，などその土地にあったことを考えないといけないことがわかりました。
- ・強い思いだけでなく，なにより道筋の示された具体性を地域の方々は求めているということに気づいたのである。
- ・地域の方々と一緒に考え，話し合いをし，力を合わせなければ，意味はないのである。
- ・新しいものを作るばかり考えるのではなく，今あるものを活用することを大切にしようと思った。
- ・私自身，地元に対する思いが強くなったように思う。
- ・一番学んだのは人のつながりのように思う。
- ・その地域の方々のうわべだけの感情ではなく本当の思いを知らなければ人の心を動かすような提案はできないのだと思います。
- ・その地域の土地や環境を目で「見る」ということと，1人の方の意見だけでなく，たくさんの方々の考えを「聞く」ということができ，自分たちの案をより明確にすることができた。
- ・地域の方々との交流だけでなく，町を直に歩いて触れていくことが，地域の活性化を進める上で必要なことだと学びました。
- ・地域の方々の考えを混ぜながらプロジェクトの枠組みを作り，提案を投げかけることで，イメージしやくすなり，実行に移すきっかけになるのではないかと考えます。
- ・考えるだけではなく，実現することが最終目標であり，考えを積み重ねてほぐす作業が一番大切だということ学んだ。

どのような地域貢献ができたか（レポートより）

- ・地域を活性化させるきっかけづくりとして役に立ったのではないかと思います。
- ・地域の新しい売り出し方のようなものを考えるきっかけ作りが出来たと思います。
- ・外からの視点で意見を提案することができたのではないかと思います。
- ・玖島と浅原の競争意識でも，最終的に2つの地域が連携するのも新しい考えなのかもしれないという意見が地域の人から出てきた。このような気づきは今回の活動がもたらしたものであると思う。

- ・地域の方々の意識改革だと思います。
- ・地域の方の地域への関心と愛着心の向上
- ・地域の人の反応を見る限り、自分は「新しい視点」「地域の整備」が大切になるということをお伝えされたかなと思います。
- ・地域内での人間関係が広がっていく空間となるのが期待できます。
- ・意見を取り入れつつ、より良いもの、実現可能なものにどんどん近づけていくことができました。
- ・アンケートなどではなく直接顔を合わせ、僕たちの案を介して、市の方と住民の方の意見交換の場が作れたということが、地域貢献できた点だと考える。
- ・話をしっかり聞く

西広島

現地で得たことと学んだこと（レポートより）

- ・その企画を進めていくうちに多くの人と接することになり、難しいと同時に楽しさも感じられた。
- ・もっと具体的に案をかんがえていかないといけないことを学んだ。
- ・発表準備の必要性を学ぶことができました。
- ・現地に行くことで町に潜む魅力や、おもしろい点を見つけられるようになったことです。
- ・私たちのチームは他の班と比べて、ミーティングから現地行動まで統率が図れており、チームでまとまっていたように思われる。しかし、最後のいよいよ形にできる段階に入ってきて、少し自分には関係なさそうだと感じたであろう事柄には、人任せになってしまう人が出てしまった。一緒に企画を進めているだけで、チームであるという意識をもつてもらうことができなかつたのではないかと思われる。
- ・地域でアクションを起こそうとしている人達に自分のアイデアを伝えるときは、アイデアを伝える前に、自分がどんなビジョンをもってそのアイデアに取り組んでいるのかを伝えることの大切さを再認識した。
- ・地域を活性化するためには周りをいかに巻き込んでいくことがとても大事だということだ。
- ・失敗を失敗でおわらせないということだ。
- ・地域貢献するためには情報発信の仕方はとても大切だと気付いた。
- ・地域を開発するにあたって地域に人をいかにして集めるか、そして地域にお金をおとさせるかということである。
- ・講義を受けたり、現地調査をしていくうちにチームワークが良くなってきたように感じ、このグループで良かったと感じるようになりました。このようなことからグループで問題を解決する力、協調性を学ぶことができました。

- ・アクシデントがあったばあいでも余裕を持って行動できるようなタイムスケジュールをグループでしっかり話し合っただけで考えたり、周りの意見を簡潔にまとめて文字にする力が必要であったと感じます。
- ・失敗から企画の作成において、事例の調査、その案の狙いと効果、実施するにあたっての現地の状況、そしてなにより自分たちのやりたいこと、これらを明確にすることが必要だと学ぶことができました。
- ・それでも諦めずに企画を提案して実施できたのはグループみんなの力だと思います。グループの存在が必要不可欠であることを学ぶことができました。
- ・新しいことに挑戦することは勇気がいるとは思いますが、そこをどうやって「やってみよう」と思わせるかが私達の役目であると思った。
- ・ものづくり、町づくりはビジョンを味覚にすることが必要で、理想の未来像、短期的、長期的ビジョンの思考、そしてプロジェクト（戦略）で人間の営みから生まれる活動、目的を明確にする。そしてプラン（計画）環境を良くするための行動、目標を決めることが大切であると学んだ。
- ・このような地域貢献活動は、まずは自分たちでやった方がいいということ。
- ・もう一つはメンバー全員案件に納得した内容ではなかったから。メンバー内でも問題があった。この案を考えたのは私である。私自身はこの案でいいと思ったのだが、他メンバーはあまりこの案にじっくりきていなかった。そのためかあまり協力的ではなかった。メンバー全員でこの案をやっていきたいと思えるようにならないと、企画は思うように進まないだろう。
- ・一言でいうと、チームとしての形を考えた回でした。先生や田中さんとの連絡、まとめるという作業をリーダーにまかせきりにしていたことが原因で、リーダー主体のグループになってしまったのではないかと感じました。

どのような地域貢献ができたか（レポートより）

- ・少しでも己斐のことを真剣に考え、どうより良くしていくか考えるだけでも地域の貢献になっているのではないかと思います。地域の人も修道大学の生徒が己斐の具体案を考えていることで、地域の人達にも火がついたのではないかと思います。
- ・もともとは地域の住民がこんなものを作ってみたいと思っていたこい焼きを学生がその活動に加わることで、理想から現実に変える先駆けを作ることができたと思う。
- ・火種はばらまけたと思います。もしですが、今回のライブイベントが成功すれば自分たちの班は授業とは関係なくこの企画を進めていきたいと思っています。
- ・地域貢献ができたと言え、活性化のための案の提案や、アンケートを取ったことで地域の人の意見を反映できたところだ。
- ・地域の方たちと一緒に地域を盛り上げようとする気持ちを持って調査ができたと感じま

す。こういった視点から見ると、自分たち大学生が新鮮なアイデアを提案することで地域の方には見えにくい視点から西広島について考えることができ、地域貢献できていたのではないかと思います。

- ・ 私たちが関わることで地域側にも新しい発見があったと思います。
- ・ 新しい事例を生み出したことは大きな貢献だと思います。

ランダムなグループ分けである西広島の受講者の方がグループ自体やグループに関する気づきが多いことが明らかになった。廿日市は地域との関わりに関して、また提案をどのように具体的に実施していけば良いかの考察が多くなっている。

4. 終わりに

4-1. まとめ

ここまで明らかにになったことをまとめると表5の通りである。それを踏まえて考察を加える。

表5 まとめ

	廿日市玖島・浅原	西広島駅周辺
受講者数	29名	28名
グループ分け	8グループ・ピッチ方式	6グループ・ランダム方式
提案の質の比較	大きな差はない	
立案期間と提案修正の回数	短・2回	長・3回
自学自習の比較	取り組みに大きな差はない	
グループワークに関する振り返り	少	多

4-2. 考察

成績評価の観点で考えると、ランダムに公平なチームであるべきではないかという仮説があった。しかし本コースのPBL型授業においては地域貢献の側面を持つため、講義の成果の比較結果をもとに、地域イノベーションの実現を目指す上でのグループ分けについて考察する。

グループ分けの方法によって提案の質の差は認められなかったことについては、どちらの地域も提案を求めている段階であり、提案、修正の議論が地域の方々とも十分に行われて、提案の質が上がったと思われる。また廿日市では一回目の訪問では提案を行っておらず、提案修正のサイクルは西広島駅周辺に比べると一回少なく、期間も短い。同じ意向を持った学生同士があつまるピッチ方式のチームビルディングを行ったため、提案を具体的

にまとめるまでが早かったのではないかと考える。

自学自習の参加状況も大きな差がない。一見ピッチによって内容面で引き寄せられたように見えるが、仲の良いメンバーや同じ学部学科でグループを組んでいる傾向もあると考えられる。

活動の振り返りにおいては、西広島の受講者の方がグループの重要性やグループ内の情報共有が重要であるという学びを得ている。それは言い換えると地域貢献以前に、グループ内の障壁があり、具体的に案をまとめるまでに時間がかかることが考えられる。地域貢献の側面を持つ講義においては、地域貢献自体に注力できない結果を招く可能性がある。逆にランダムかつ専門性の多様性に配慮したグループ分けとすることができれば、仲よしグループや同じ学部学科のグループと比べると学生の学びに関しても多様な広がりが出てくるとも考えられる。

地域貢献という観点から考えると、案を早急に具体化し、地域住民がイメージしやすいものを提示した上で、ビジョンや意識を共有していくことが求められている状態の場合、ピッチ方式など同じ意識を持った学生同士でグループを組み、案をまとめやすく進める方が望ましい。逆に専門性に富む提案を求められているような状態であれば、専門性の多様性に配慮したランダムなグループ分けの方が、求められている提案にたどり着けると考えられる。

地域貢献の側面をふくむ講義に関して、地域イノベーションの実現を目指した提案の際には、地域の状況（初期提案なのか、具体的に案をまとめていく段階なのか）に合わせたチーム分けが必要であることが明らかとなった。

4-3. 今後の課題

ピッチ方式のグループ分けはその実態に注意する必要がある。また合わせて専門性の多様性に関する配慮もグループ分け時に工夫し、分析・考察する必要がある。